

**「言葉尻だ」と
切り捨てる人は、
相手の違和感も
切り捨てる。**

小さなズレにどう向き合うかで、
その人の「在り方」が決まる。



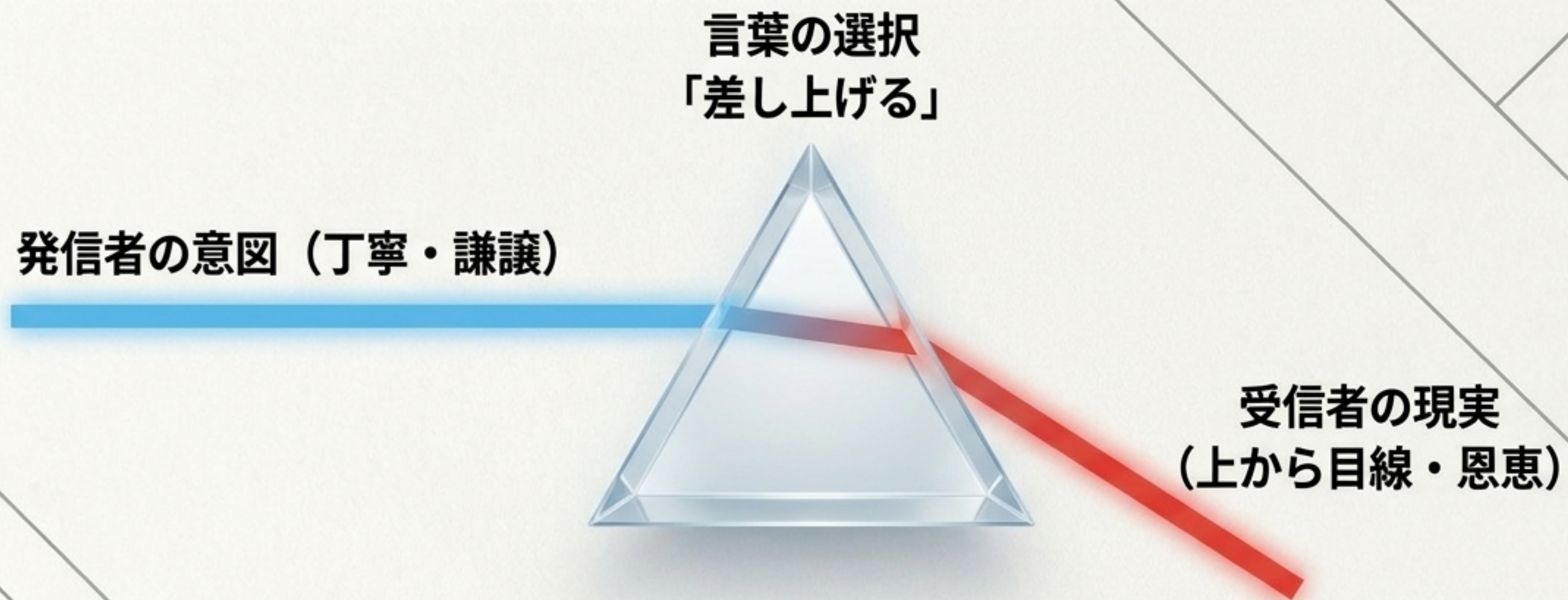
わずかな「響き」が引き起こす違和感

伝えたい意図：
「体験をお願いしたく、
お電話しました」

実際に口にした言葉：
「体験させていただきたく、
お電話を**差し上げた**」

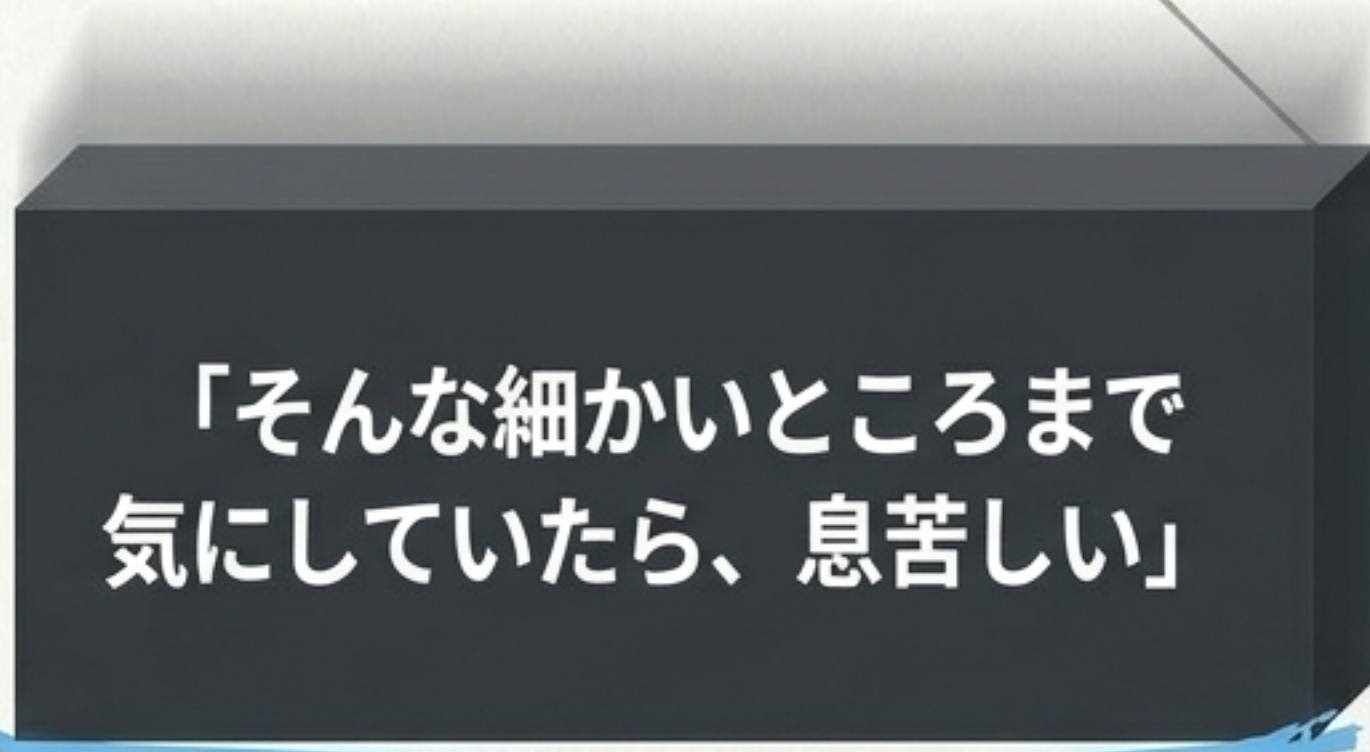
丁寧に話そうとするあまり、「プレゼントを差し上げる」ような、
相手に恩恵を与える響きが生まれてしまう。

意図と結果の間に存在するフィルター



「丁寧に話したつもり」という発信者の事実は、
受信者の耳に届くまでに変質する。

思考を停止させる「自己都合」の壁



「そんな細かいところまで
気にしていたら、息苦しい」

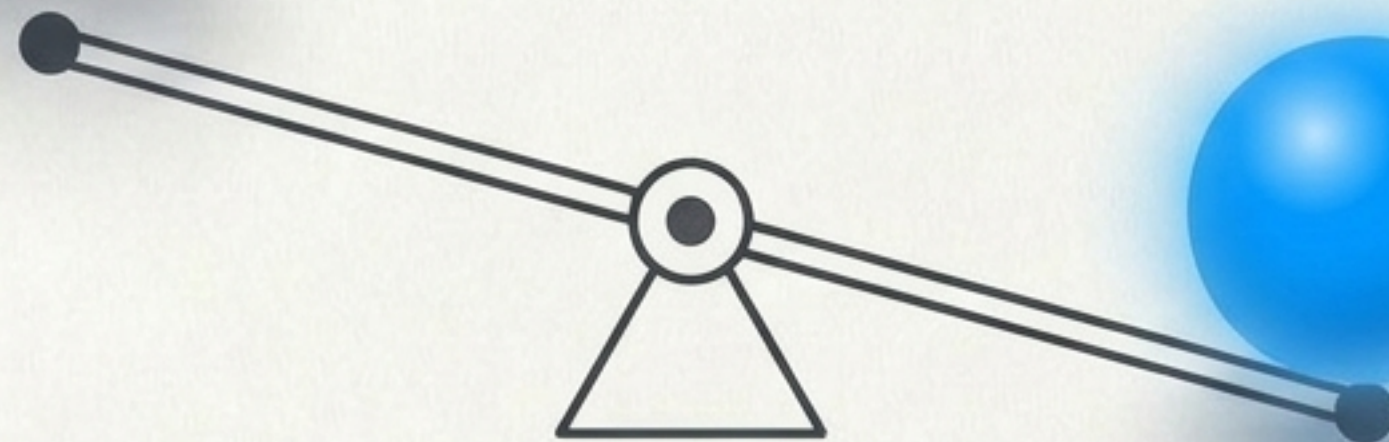
この言葉の裏にある本質：
「自分は丁寧に話したつもりなのだから、相手にもそう受け取ってほしい」

それは相手への配慮ではなく、自分側の都合の押し付けに過ぎない。

「言葉を大切にすること」の本当の意味

言葉を大切にすることは、丁寧な言葉を並べることではない。
相手にどう届くかまで気を配ることだ。

丁寧な言葉を
並べること



相手にどう届くか
気を配ること

自分にとっては小さな言葉の違いでも、相手にとっては敬意の違いになる。

指摘を受けた瞬間に、 誰を大切にしているかが表れる

「
気を遣った自分まで否定されたようで、悔
しくなる気持ちはわかる。しかし、そこで
話を閉じてしまえば、相手が教えてくれ
た「自分には聞こえていなかった響き」を
知る機会を永遠に失う。
」

■ 反発するか、耳を傾けるか。そこが学ぶ姿勢の分かれ目となる。

成長を分かっ2つのマインドセット

	「言葉尻だ」と切り捨てる人	違和感の理由を考える人
焦点	自分（意図を認めてほしい）	相手（どう響いたかを知りたい）
反応	防衛・拒絶（息苦しい）	好奇心・内省（なぜそう聞こえたのか）
結果	自身の成長機会の喪失	「自分の 死角 」の発見と進化

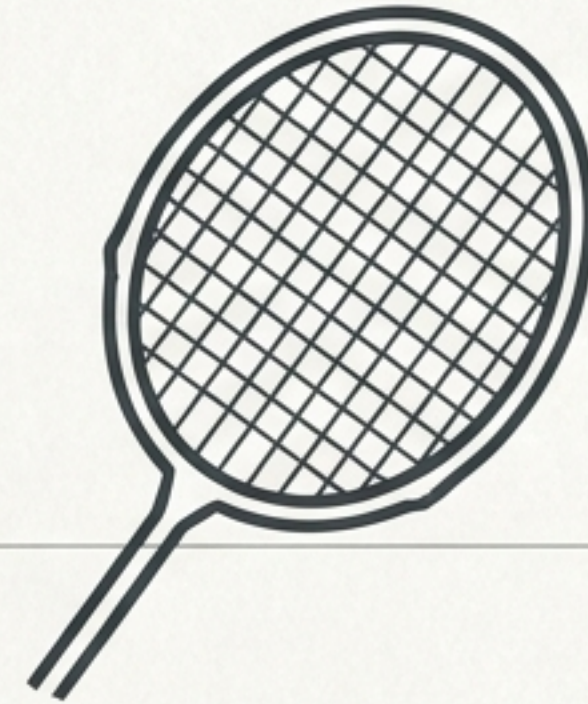
同じ違和感を持つ必要はない。

だが、「なぜそう聞こえたのか」を考えることはできるはずだ。

言葉の響きとラケットの向きは、全く同じ構造を持つ



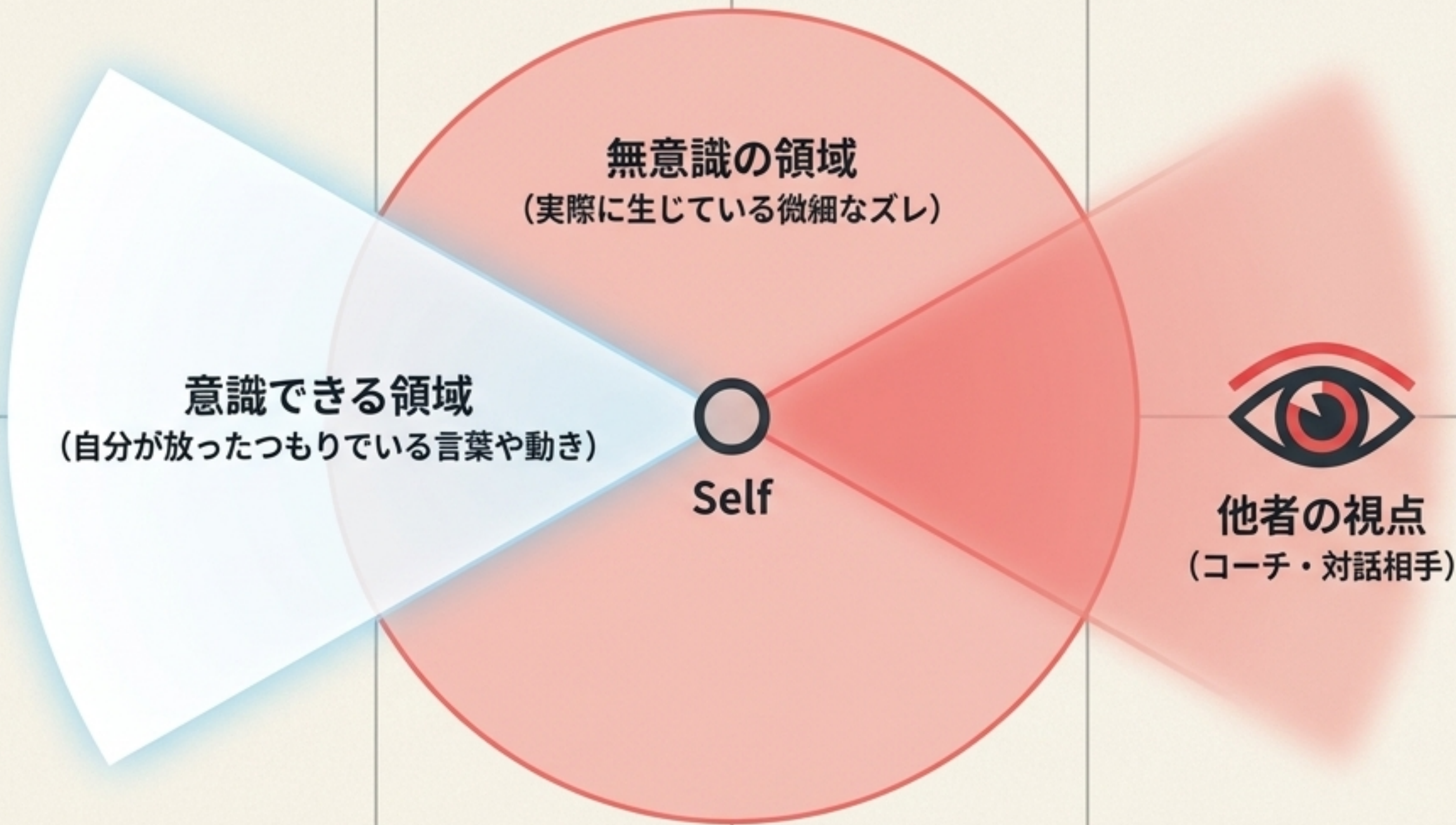
事象：無意識に出た言葉のニュアンス
結果：相手に違和感を与え、信頼を失う
本人の認識：「そんな細かいこと」



事象：本人には何でもない一歩やラケットの向き
結果：失点につながる決定的な隙となる
本人の認識：「そんな細かいこと」

コーチの指摘を「細かいこと」と流せば、その癖は次の一球にも残る。

自分の感覚では捉えられない「死角」



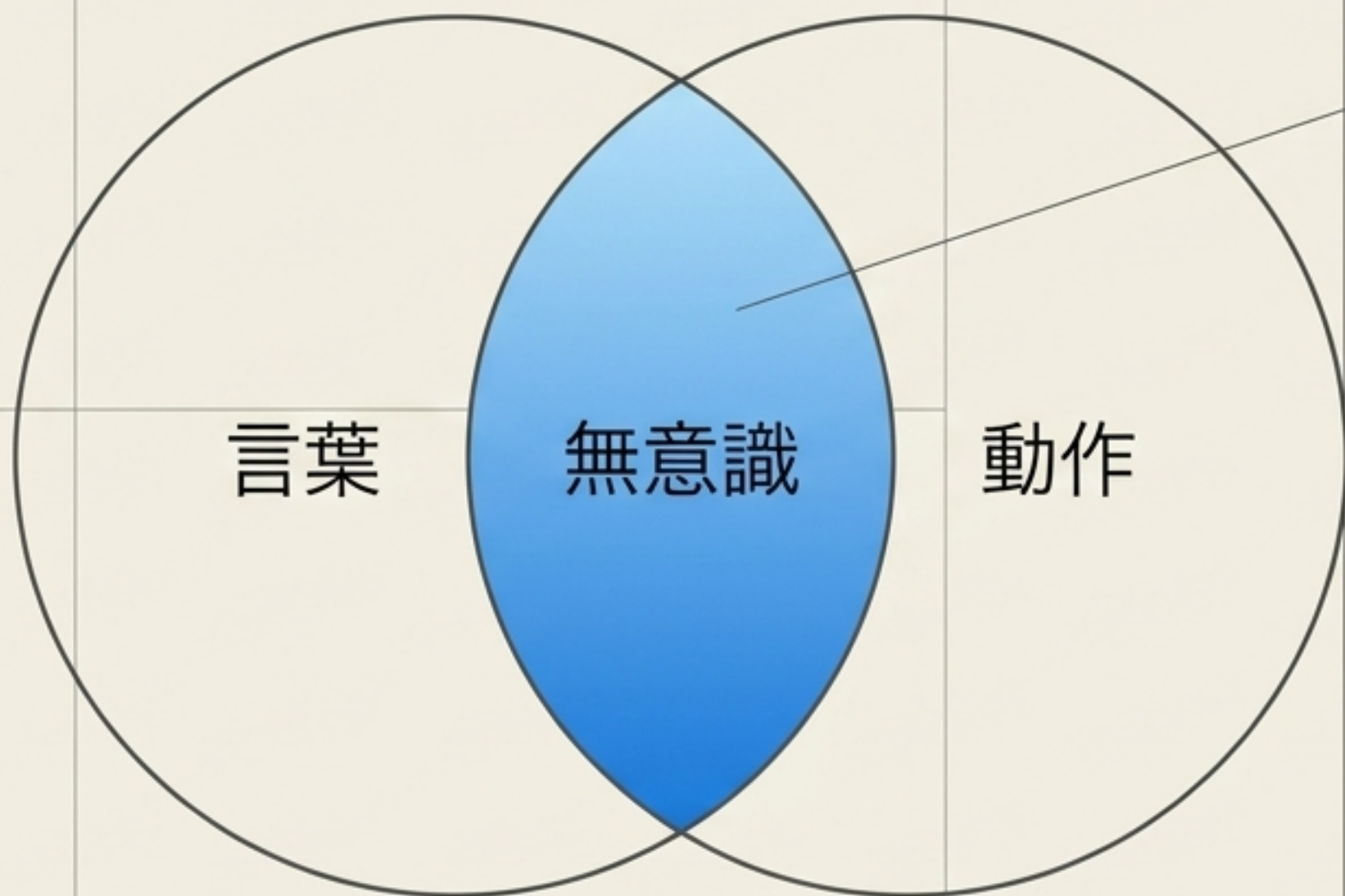
言葉も動作も、無意識に出るものほど、自分だけでは気づきにくい。



**自分には聞こえなかった。
だからこそ、聞こえた
人の話に価値がある。**

正しい敬語を覚えることや、フォームを丸暗記することではない。
自分の感覚では捉えられなかったものに、目を向けられるかどうか。
そこが問われている。

無意識という共通の脆弱性



- 私たちは、自分の意図を完璧にコントロールしていると錯覚する。
- しかし、最も重要な情報は「意図の外側」で漏れ出ている。
- 他者の違和感は、この無意識を照らす唯一の光である。

「そこまで考えていませんでした」を、恥ではなく成長の入口にする



「そこまで考えていませんでした」

**自分の至らなさに直面したとき、自己正当化の壁を築くか、
それとも新たな視点を受け入れるか。
無知を知ることが、決して恥ではない。**

あなたはどちらを選ぶか？

指摘を受けて
自分を変えられる「強さ」

指摘されないことで
守られる「安心」



小さな違和感から目を背けない強さが、
圧倒的な成長をもたらす。

PHOENIX Aichi

豊田市・岡崎市 バドミントン教室

動作の仕組みと、成長の哲学を学ぶ場所。

PHOENIX愛知は、コートの上の技術だけでなく、
自分自身をアップデートし続けるためのマインドセットを指導します。